

郷土室だより

『江戸・東京の川』中央区の川(七)

前号では、日本橋川が戦後の改修工事や高速道路の建設、河川法の改正などによって変化する経過を確認しました。また江戸期には、日本橋川の河口部や隅田川沿いの水運に便利な場所(兜町・茅場町、蛸殻町・箱崎や浜町など)が、武家地に独占されていたことを、あらためてイメージしてもらうために『嘉永江戸図』を掲載しました。

今回は、前号で紹介した『江戸十組問屋便覧』(文化一〇・一八一三年)と『諸問屋名前帳』(嘉永四・一八五一年)を中心に、『江戸買物独案内』(※)と合わせて、日本橋川沿いの河岸地について考察してみます。

※江戸買物独案内(文政七・一八二四年刊)

江戸の業種別に商店案内をまとめたもの。飲食店を含めて二六二二店を収録。商品の購入のための便をはかった。

日本橋川の左岸、北鞘町河岸から品川町裏河岸、魚河岸、末広河岸、鰐河岸、そして最後に河口部の北新堀河岸について見ていきます。

◇北鞘町河岸

外濠から分かれた日本橋川の左岸、北鞘町の川沿いの河岸地、一石橋と品川町裏河岸の間に位置します。『寛永江戸図』(武州豊嶋郡江戸庄図、寛永九・一六三二年)や『承応江戸図』(武州古改図、承応二・一六五三年)には「北かし」、『新添江戸之図』(明暦三年新添江戸之図、一六五七年)に「きたかし」、『元禄江戸図』(江戸御大絵図、元禄三・一六九〇年)には「まさかし」と記載されています。

『東京府誌』(以下「府誌」と略します)には、横木河岸「江戸図説や天和二(一六八二)年の図等に南裏を横河岸と云う。寛永江戸図の北河岸につくる。面積は四一七坪二合九勺。雑業者が最も多く、商(家)は三四戸、工(匠)は五戸」とあります。

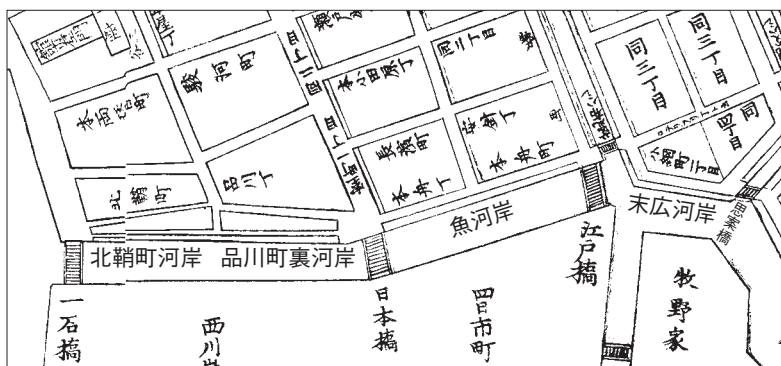
※東京府誌

明治一一年に編纂され、明治初年当時の河岸地について記載した資料。

○北鞘町

北鞘町は、現在の日本橋本石町一丁目にあたります。西は外濠、東は

品川町に接して、日本橋川に面する南側が北鞘町河岸です。町名の由来は、江戸の初期に刀剣の鞘をつくる職人が多く居住していたこと、刀剣を売る店もあったことによります(幕末には、これらの職人たちの多くは、居住していませんでした)。町名に「北」の冠がつくのは、京



(尾張屋板切絵図「神田浜町日本橋北之図」を基にして作図)

橋の南鞘町に対してです。

『名前帳』に問屋数は一八軒。地廻米穀問屋三軒・脇店八カ所組米屋三軒・春米屋三軒と米関連の問屋が九軒、竹木炭薪問屋二軒・炭薪仲買四軒と燃料関係の問屋が六軒とあり、これらの輸送手段として舟運が利用され、河岸地で陸揚げされていたようです。他に両替屋一軒、紺屋一軒、その他一軒です。

『新撰東京名所図会』(※)には、清水廻漕店、井上運送店、運送業兼石炭商の富岡商店、鈴木太物店、炭薪問屋の鎌屋、魚問屋の枅留、待合業の松葉屋・登喜和、旅館業の下伊勢などの名前が見え、舟運がまだ機能していたことが分かります。

※新撰東京名所図会

※新撰東京名所図会

風俗画報(明治二二・一八八九年)に創刊されたグラフィック誌は、江戸期の風俗の考証、流行風俗の記録を基本に編集。図版や写真などを多く採用。風俗画報の臨時増刊形式を取って、明治二九・四二(一八九六〜一九〇九)年に発行。

北鞘町一円(裏河岸の一部を含む)は、関東大震災後の帝都復興区画整理事業で、昭和七(一九三二)年九月一日に本石町一丁目に改称されました。

◇品川町裏河岸

北鞘町河岸の東側に続く品川町

裏河岸は、品川町から独立した一町にあります。蔵が連なる河岸地は、俗に「北河岸」とも呼ばれました。『御府内備考』(※)に「江戸期から鉄物屋・鍛冶屋が多く居住していたことから、南角部分が「釘店」と俗称された」とあります。舟運を利用して鉄製品などの重量物を搬入するのに便利のため、これらの業種の店が集まったのです。

※御府内備考

幕府官撰の地誌。文政九(一八二六)年、幕府が『御府内風土記』を編纂するための参考資料として三島政行らにまとめさせたもの。町方書上などをとくに江戸の歴史や各町の沿革・概要が書かれている。

『府誌』に「品川町裏河岸の南裏にあり、日本橋川に沿う。面積二九八坪八合六勺、商戸、雑業其数相均し、工人は五戸のみ」とあります。

明治一〇年二月二八日、日本橋より以西一石橋までの河岸地は、裏河岸と正式名称になりました。

○品川町裏河岸

品川町裏河岸は、現在の日本橋室町一丁目にあたります。北鞘町の東に位置し、日本橋川沿いには蔵地が続いていました。寛永江戸図に「なべ町」とあり、その川岸部分が「北かし」、『承応江戸絵図』(享保九年頃・一七二四年)では「品川町ウラガシ」とあります。

『江戸買物独案内』に釘鉄銅物問屋・錫鉛問屋の鉄屋、鍋釜問屋の釘屋、空樽問屋の富山屋、醤油酢問屋の伊勢屋、菱垣廻船問屋の錢屋、鯉節・塩干肴問屋の丸屋、鼈甲櫛笄や象牙・蒔絵物類・白竜香の保根屋などの名前が見えます。

『名前帳』には問屋数が一三軒。東側に隣接して魚河岸があること

から、肴問屋三軒と下り鯉節問屋が一軒。他に廻船問屋二軒と下り水油問屋・水油問屋・釘鉄銅物問屋が各一軒あり、舟運が利用されていたことが分かります。その他には両替屋・炭薪仲買が各二軒。ちなみに品川町は、品川町裏河岸の北に位置し、現在の日本橋室町一丁目にあたります。『寛永江戸図』には「志な川丁」と記載。町名の由来は、『東京案内』(※)に

「鑑の製作に用いる品革(紺地に染すかし模様を彫った皮革)を造る職人が多く居住していたことによる」とあります。

※東京案内(明治四〇・一九〇七年刊、東京市)

東京市の地誌案内書。総記・皇城記・市街記・近郊・付録からなる。市街記は旧一五区に分けられ、総記から町名、交通など一〇項について記載。

『名前帳』の問屋数は五軒で、肴問屋二軒の他に春米屋・炭薪仲買・その他各一軒。『新撰東京名所図会』には、玉置廻漕店、鯉節商の大瀧商店、ほかに佐々城本友診察所、高比良養次郎診察所、東都家

寿多銀行、旅館業の松屋の名前が見えます。

品川町裏河岸一円（裏河岸の一部を含む）と品川町一円は関東大震災後の帝都復興区画整理事業で、昭和七（一九三二）年九月一日に室町一丁目に改称されました。

その後、市場の取引量が増えて、しだいに間屋組織が拡大し、本小田原町、本船町、接針町、長濱町一帯へと拡大。これらの区域を総称して魚河岸と呼びました。白石孝氏は『日本橋街並み繁昌史』で「魚河岸には市場だけではなく、問屋や仲買たちがここに住み暮らしていたこと」が「この界わいの特徴」で、「強い連帯感と魚河岸独特の気風をもつ街」と述べています。また吉原遊郭（現・台東区）や芝居街（堺町・葺屋町）とともに、「一日千両」と称された江戸随一の繁華な街。屋敷地の小間一間について一千両の値がついたと伝えられています。

◇魚河岸

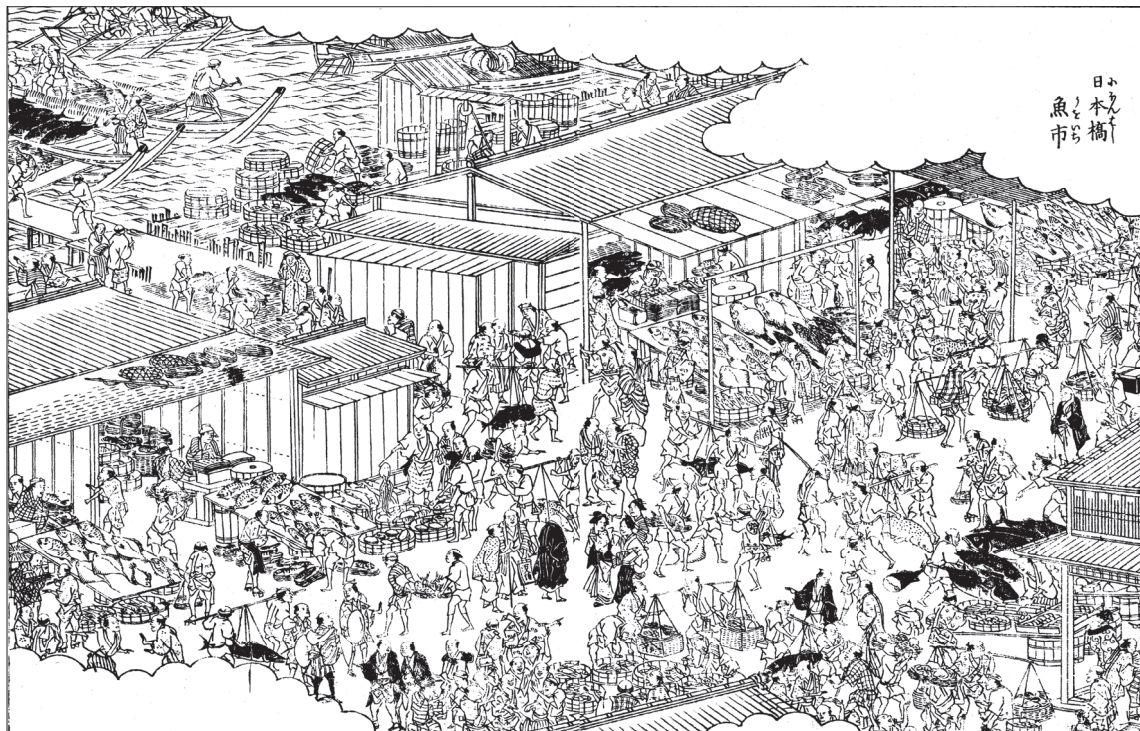
江戸・東京の河岸地で最も知られているのが、日本橋の魚河岸です。大都市江戸・東京の生鮮食品市場の中心は魚河岸で、他にも白魚河岸・新肴場、雑魚場（現・港区）などもありました。魚河岸の起こりは、家康の江戸入り後、撰津（大坂）の佃村から森孫右衛門ら漁師たちが江戸に移り、正保元（一六四四）年に幕府から拝領した洲に佃島をつくり、漁業基地としたことに始まります。彼らは江戸湾内の漁業のほか隅田川の白魚漁を営み、鮮魚を幕府に献上、残った魚を江戸市中で販売しました。

はじめの頃の魚河岸は、日本橋北詰から江戸橋辺りまでの河岸地

にありました。河岸地は西から「芝河岸」・「中河岸」・「地引河岸」・「高間河岸」とも呼ばれ、入荷する魚介類や船主などにより、河岸地が細分化されていました。

魚河岸には幕府への鮮魚献上と引きかえに、集荷と販売の大きな権限が与えられました。江戸湾全域や相模湾などでとれた魚が、早船で魚河岸に集められ、江戸市中に販売されました。天和二（一六八二）年までに、本小田原町・本

はじめの頃の魚河岸は、日本橋北詰から江戸橋辺りまでの河岸地



日本橋魚市（「江戸名所図会」より）

船町・本船横店・按針町の各町単位の組合Ⅱ四組問屋を結成。その後の魚河岸の発展にともない、延宝二(一六七四)年には本材木町二・三丁目にも魚河岸が拡がり、新肴場という町人のための市場ができました。そして四組問屋と交代(上旬は新肴場、中下旬を四組問屋)で、鮮魚を献上するようになりました。

維新前の魚市場は、幕府の許可を得て魚問屋や仲買人の株を買い株仲間に入ると、「税金」として問屋に納漁の制が行われたのみで、比較的自由に営業ができました。維新後は、東京府の管理となって、納漁の制は廃止されます。

大都市江戸・東京の台所を支えてきた魚河岸が、日本橋から築地に移転したのは、関東大震災直後のことです。

ちなみに日本橋より以東江戸橋までの河岸地が、「魚河岸」と正式名称になったのは、明治一二年三月一八日のこと。

○室町一丁目

室町一丁目は、現在の日本橋室町一丁目にあたります。日本橋北詰の一丁目から三丁目まであり、

一丁目はその南端に位置しています。東は本小田原町一丁目、長浜町、本船町に接し、日本橋北一丁目とも呼ばれました。

『寛永江戸図』に「むろ町一〜三丁目」とあり、また日本橋北詰の西へ入る横町を『寛文新板江戸絵図』(新板江戸大総図、寛文一〇(一三・一六七〇)〜七三年)に「あまかさき丁」、「元禄江戸絵図」に「あまたな」とあります。

東の長濱町に通じる横町には、「高砂新道」の俗称がありました。俗称の由来は、延宝年間(一六七三〜八一)に、角でちりめんまんじゅうを売る高砂屋が、高砂の翁おぢの人形を飾っていたことにより

駄問屋の島屋などの名前が見えま

が見えます。

○本船町

本船町は、現在の日本橋室町一丁目と同本町一丁目にあたります。南は日本橋川、東が伊勢町堀(西堀留川)の「米河岸」に面しています。本小田原町・按針町・長浜町・室町一丁目とともに、「日本橋魚河岸」の中心の町として魚問屋や卸商が最も集中し、早朝から賑わいを見せていた街。「三日河岸」の俗称もありました。

『寛永江戸図』に「大ふな丁、同二丁目」、「寛文新板江戸絵図」・『延宝江戸方角安見図』(江戸方角安見図、延宝八・一六八〇年)にも「大船町」とあります。この辺りは、江戸期以前は、海岸に面して漁港だった場所。江戸の初期、江戸湊が道三堀の河口部Ⅱ江戸橋付近にあった頃から、すでに舟運の中心地として栄えていました。また大船町の町名は、小舟町に對して付けられたものです。

『江戸名所図会』(※)に「魚市船町、小田原町、按針町等の間、悉く鮮魚の肆みせなり。遠近の浦々より海陸のけじめもなく、鱈魚をこ

は大店が軒を連ね、一丁目に本船町・本小田原町・按針町とともに魚河岸と青物市が立ちました。『江戸買物独案内』に鰹節塩干肴問屋の丸屋、乾物問屋の大黒屋、乾物の丸屋、乾物問屋の大黒屋、乾物類卸の万屋、鶏卵問屋・焼玉子御進物折詰の大津屋、塗物問屋の伊勢屋、小問物問屋の遠州屋、練綿・木綿・小問物・下り蠟燭・下り雪

『新撰東京名所図会』には、鳥問屋の鳥伊勢屋・大辰や東京鶏卵問屋組合事務所、生魚商店の尾長と鰹節問屋の高見澤商店、乾物雜穀商会の萬屋、乾物雜穀肥料品販売の山形屋、乾物雜穀問屋の山形屋、乾海苔商店の山形屋や山本乾海苔商店や砂糖問屋の伊勢平、大坂煙草(株)東京支店、日本通商銀行など

こに運送して日夜に市を立て其販

わへり」とあり、『江戸買物独案内』にも、漁具・船具・魚類加工関連の商人などの名が記載されていて、芝・中・地引の各河岸には、船具や麻などを扱う店が多かったことが分かります。

※江戸名所図会

斎藤幸夫・幸孝・幸成撰、

長谷川雪旦画。文政一二（一

八二九）年、天保五（七（一

八三四）一八三六）年刊。江

戸城の主要及び江戸を七分割

して、各方面の寺社・旧跡・

名勝などを解説。実地調査や

古書の引用と考証を踏まえた

もの。

『名前帳』に問屋数は一一五軒。

肴問屋が七〇軒と下り鯉節問屋一

軒あり、文字通り魚河岸の中心地。

また河岸八町米仲買二〇軒・関東

米穀三組問屋四軒・地廻米穀問屋・

脇店八カ所組問屋が各一軒あり、

米穀関連問屋が二六軒を数えるの

は、東側に隣接する伊勢町堀（西

堀留川）に「米河岸」があったか

らです。ほかに両替屋三軒、藍玉

問屋・住吉組荒物問屋各二軒、地

廻水油問屋・瀬戸物問屋・炭薪仲

買・竹木炭薪問屋が各一軒。

『府誌』に、魚河岸「江戸橋前の

河岸を云う。面積一三四七坪三合、

その中に三日河岸、木更津河岸、

高間河岸、蛸河岸などの俗称があ

り。商人七五戸、雑業八七戸あり、

工手は一〇数に過ぎず（魚市）」と

あり、本船町が魚河岸の中心に位

置していたことが分かります。

本船町は、関東大震災後の帝都

復興区画整理事業で、昭和七（一

九三二）年九月一日に室町一丁目

（魚河岸の一部を含む）と本町一丁

目（魚河岸・末広河岸・米河岸の

一部を含む）に改称されました。

○長濱町一・二丁目

長濱町は、現在の日本橋室町一

丁目、日本橋本町一丁目にあたり

ます。室町一丁目の東側にあり、

中央に按針町をはさんで西側が一

丁目、東側が二丁目。町名の由来

は、『新撰東京名所図会』に「長濱

新左衛門という者が、幕府からこ

の地を拝領したことによる」とし、

『日本橋繁盛記』では「近江長浜の

人が住んだから」としています。

『享保年中江戸絵図』に町名が見え

ます。

『名前帳』では、長濱町一丁目の

問屋数は七軒あり、すべてが肴問

屋です。また同二丁目の問屋数は

八軒で肴問屋が七軒。他に春米屋

一軒で、長濱町が魚河岸の街であ

ったことが分かります。『府誌』に

も「工人二戸、商家雑業各三〇余

あり（魚市）」とあります。

長濱町は、明治四（一八七二）

年六月に一丁目と二丁目が合併し

て、一つの町名になりました。そ

して関東大震災後の帝都復興区画

整理事業で、昭和七（一九三二）

年九月一日に室町一丁目と本町一

丁目に改称されました。

○本小田原町一丁目

本小田原町は、現在の日本橋室

町一丁目にあたります。東は室町

一・二丁目、西が伊勢町、北は瀬

戸物町、南が長濱町・按針町と接

しています。

慶長年中、江戸城築城の際に、

相模国小田原出身の善右衛門が、

石材の供給を請負い、この場所を

石置場としたことから、小田原町

という町名が付きましました。その後、

撰津・和泉辺りの漁夫が魚市を開

いたため、石置場は築地に移転し

て南小田原町と改称。「南」に対し

て、この地が本小田原町と呼ばれ

ました。

本船町とともに魚河岸の中心地

で、地価が江戸で最も高かったと

いわれ、魚店・干魚店・乾物店・

八百屋・漬物店・佃煮屋などが軒

を並べ、日夜市が立って賑わった

場所。明治四（一八七二）年六月

に一丁目と二丁目が合併、一つの

本小田原町になりました。

『名前帳』に問屋数は三六軒あ

り、肴問屋が三〇軒。その他に春

米屋一軒、竹木炭薪問屋一軒・炭

薪仲買二軒、廻船問屋一軒、両替

屋一軒となっています。

『府誌』に「商一五三戸、雑業一

一四戸、工は僅に八戸あり（魚市）」

とあります。『新撰東京名所図会』

には、魚問屋の佃金・米新、海産

物商店の金政、海産物問屋の高崎、

草野海産物商店や鳥商店の東国

屋・諸島鳥卵問屋の越後屋、宮内

省御用の魚類調進所（江戸時代には

納屋と呼ばれた）の名前が見え

ます。

○本小田原町二丁目

本小田原町二丁目は、現在の日

本橋本町一丁目にあたります。同

一丁目とともに日本橋魚河岸の中

心地。『名前帳』の問屋数は一一軒

で、肴問屋が九軒。他に春米屋一

軒、両替屋一軒とあり、一・二丁目とも、魚市場を構成する肴問屋が多い街でした。

本小田原町は、関東大震災後の帝都復興区画整理事業で、昭和七（一九三二）年九月一日に室町一丁目と本町一丁目に改称されました。

○按針町

按針町は、現在の日本橋室町一丁目にあたります。東西を長濱町、北は本小田原町、南を本船町に囲まれていた街です。慶長五（一六〇〇）年日本に漂着し、後に外交顧問として家康を迎えられた、ウイリアム・アダムス（三浦按針）

の拝領屋敷があったことから町名が付きました。『寛永江戸図』・『延宝江戸方角安見図』に「あんしん丁」とあり、古くは町内に大ドブと呼ばれる小川があり、海に通じていたと伝えていきます。

『名前帳』に問屋が二〇軒で肴問屋が一九軒、他に炭薪仲買一軒。魚河岸を構成する街の一つで、鳥問屋も数軒ありました。

按針町も、関東大震災後の帝都復興区画整理事業で、昭和七（一九三二）年九月一日に室町一丁目

と本町一丁目に改称されました。

◇末広河岸

小網町一丁目の伊勢町堀に架かる荒和布橋から堀江町入堀に架かる思案橋の間の河岸地は、末広河岸と呼ばれ、川沿いには蔵が連なっていました。『府誌』には「船積問屋多し」とあります。河岸地には奥川筋船積問屋が多く集まり、舟運の中心地でした。明治一〇年九月一〇日、荒布橋より思案橋までの河岸地が、末広河岸と正式名称になりました。

○小網町一丁目

小網町一丁目は、現在の日本橋小網町にあたります。北は小舟町三丁目、東は堀江町四丁目に接し、西は日本橋川沿いの河岸地。細長く続く片町で、旧石神井川の河口部に当たります。

小舟町などとともに漁村として開けた場所です。以前は入江ヶ岡と呼ばれていました。家康の江戸入り後に、小網稲荷の名を取って町名としたと伝えられます。

『承応江戸絵図』に「こめかし」、『寛文新板江戸絵図』には「こあミ

丁一丁メ」とあります。名主の普勝伊兵衛は、中川御船番所御用と御成御前日船払御用を務めていました。

『江戸総鹿子名所大全』に諸色問屋（米・油・綿など）の天野六左衛門、鳥居九兵衛、白子屋などの名前があり、『江戸買物独案内』には奥川筋船積問屋の伊藤屋、船具問屋の名張屋、魚獵網一式・麻苧

問屋の名張屋・麻苧問屋の桑名屋、問屋の名張屋・麻苧問屋の桑名屋、そして釘鉄銅物問屋の伊勢屋、水油問屋の越後屋、下り傘問屋の丸屋、京御菓子司の大坂屋、藍玉問屋の藍屋などの名前が見えます。

『便覧』に問屋数は一四軒。内訳は船具問屋一軒、奥川筋積問屋二軒、麻苧問屋三軒、釘鉄銅物問屋・鍋釜問屋・水油仲買問屋・下り傘問屋・綿打道具問屋が各一軒、その他三軒。また『名前帳』には問屋数二四軒。下り米問屋五軒、河

岸八町米仲買七軒、関東米三組問屋四軒、雑穀為登組二軒、地廻米穀問屋・脇店八カ所組米屋が各一軒と米関連の問屋が多く、二〇軒を数えます。他に炭薪仲買・下り

蠟燭問屋・住吉組荒物問屋・釘鉄銅物問屋が各一軒とあります。

明治期は、日本橋川の舟運を利用する運送業者が多く、『新撰東京名所図会』に、「水運の便利を有するを以て、廻漕もしくは運送を営む者多く、従って諸問屋またはなはだ多し」として、次の商店名を挙げています。

廻漕業の早川廻漕店、運送業の小林運送本店、賣薬化粧品齒磨商の大陽堂、麻苧・船具問屋の和泉屋、紙問屋の渡植彦太郎、砂糖問屋の釜屋、生蠟々燭荒物其他の大坂屋、荒物商の岡野精三郎、和洋綿絲商の上谷など。また末広河岸には繩筵問屋の九七商店、運送業の八幡屋回漕店・陸送組本店などです。

次号では、左岸の鎧河岸、北新堀河岸と、右岸の西河岸から元四日市河岸、木更津河岸、兜河岸、南茅場河岸、南新堀河岸について考察する予定です。

（菅原健二）